

幼児教育・領域「表現」における
「美しいもの」「美しさ」についての考察
—現任保育者及び養成校の学生からのアンケート調査を手掛かりに—

深尾秀一*

滋賀短期大学 幼児教育保育学科

Consideration of the Consciousness of "Beautiful Things" and "Beauty"
in the Field of Art Expression in Early Childhood Education

--Through the Analysis of a Questionnaire Survey from Kindergarten Teachers, Nursery School
Teachers and College Students in the Early Childhood Care and Education Department--

Hidekazu FUKAO

Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

Abstract: In this paper, we conduct a questionnaire survey of kindergarten teachers and nursery teachers about the words "beautiful things" and "beauty" in early childhood education, and investigate and clarify their consciousness of the words. The words "beautiful things" and "beauty" appear several times in the guidelines for kindergarten education, nursery school childcare, and centers for early childhood education and childcare. However, the words are ambiguous and not clarified. As a training school for early childhood education and childcare workers, we have to provide guidance to students. It is indispensable to grasp an understanding of the words to some extent. I asked kindergarten teachers and nursery school teachers who are currently in a teaching position how they understand the words "beautiful" and "beauty" through a questionnaire survey. The collected questionnaires were text mined to clarify their awareness of these words. We also considered attributes, such as the length of their pre-elementary education work experience and their age, in relation to their answers. The same questionnaire was also taken for new students who entered the university's early childhood care and education department to examine whether there was a difference. In conclusion, in addition to the anticipated results of the questionnaire survey, it was found that in regard to "beautiful things" and "beauty", the kindergarten and nursery school teachers showed an awareness of the child's perception of the concepts, and were paying attention to the movement of the child's mind through observation of the child.

Keyword: Art, Art Education, Early Childhood Care and Education,

* E-mail: h-fukao@sumire.ac.jp

1. はじめに

私たちが使用している言葉は明確なようであるが、その意味合いを具体的に聞かれると困るものである。特に、当たり前のようには使用されている言葉は、その意味合いを深く考えずに、自分なりの理解のもとに解釈している。その解釈の違いで問題や課題が出てくることがある。言葉のあいまいさや揺らぎの良さを否定するものではないが、皆が同じ方向を目指す場合において、規則、指示、連絡事項でこのようなことが起こることは好ましくはない。

保育者養成校において、幼稚園教育要領¹⁾、保育所保育指針²⁾、幼保連携型認定こども園教育・保育要領³⁾は、授業を組み立てる際に非常に重要な道筋を示してくれるものである。しかしこの中にも何気なく使用している言葉で、再度確認をしたほうが良いものがあると思われる。

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においては、同様の文脈で、「美しいもの」、「美しさ」という言葉が使用されている。幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領すべてにおいて、領域環境のねらいに「美しさ」という言葉が1回、内容の取扱いに「美しいもの」が1回、領域「言葉」の内容に「美しさ」が1回、領域「表現」のねらいに「美しさ」が1回、内容と内容の取扱いに「美しいもの」が各一回出現している。

特に、領域「表現」については、その領域の特性としてか、ねらい、内容、内容の取扱いすべてに明記されている。表現を構成する重要な要素の一つであると考えられる。しかし「美しいもの」、「美しさ」とはどのようなものかはっきりと定義されているわけではない。

広辞苑第(第7版)(2018)には、「美」「美しい」について、下記のとおり記述されている。

び【美】①うつくしいこと。うつくしさ。②よりよいこと。りっぱなこと。③知覚・感覚・情感を刺激して内的快感をひきおこすもの。「快」が生理的・個人的・偶然的・主観的であるのに対して、「美」は個人的利害関心から一応解放され、より普遍的・必然的・客観的・社会的である。⁴⁾

うつくしい【美しい・愛しい】①愛らしい。かわいい。いとおしい。②⑦形・色・声などが快く、このましい。きれいなものである。④行動や心掛けが立派で、心打つ。③いさぎよい。さっぱりして余計なものがない。⁵⁾

本稿では、美学の領域ではなく幼児教育という視点で、現任保育者に対して行った幼稚園教育要領の文言を示して実施したアンケートの分析をとおして考察し、幼児期の「美しいもの」「美しさ」に関する保育者の意識を探索的に明らかにすることを目的とする。また、当学の新入生へも同アンケートを行い、差異の有無を検証し今後の保育者養成にいかしていく。

2. 先行研究と方法について

2.1 先行研究

直近の研究発表では、岡本礼子(2020)⁶⁾は、「『美意識』を必要とする現代において、幼児の『美意識』を育てるための取り組みと考察」において、

子供の、“色やカタチ、素材”をより意識して受け止める行動が、より豊かに生活するための必要な意識である“美意識”を育てることにつながると考えています。“色やカタチ、素材”に関わり生活することが、より豊かな感性を持つととらえています。⁷⁾

と、多様性を重視しながら“美しさ”の基本を自然とし、自然の素材に触れることの重要さをのべている。しかし、保育者の「美意識」を育むための環境には言及しているが、そもそもの「美意識」とはなにかについては言及をしていない。

次に、幼児の美意識に関しては、田中敏明、松島暢志、関戸ひとみ、内賀良香、(2016)⁸⁾「幼児の『きれい』に関する美意識の発達—『美しい』、『清潔な』、『整然とした』を中心に—」において、美意識のなかの「きれい」を取り上げ、美しい、清潔な、整然としたという3種類の美意識の成立と幼児の特性を検証して、保育者の援助や、指導に関してまとめている。幼児の美意識に「きれい」というものがあるという前提であると考えられる。

幼児教育に特化した研究は多くないなか、美術教育という視点からは、河辺杲(1952)⁹⁾は『子供の美意識と技術の問題』において、小学生を対象に「あなたが一番美しいとおもうものはなんですか。」と問い、児童と年齢による「美」に対する意識の変化を調査している。この研究では一年生では人工美をあげるものが3割程度おり、自然美は2割程度あった。2年生になり自然美をあげるものが6割程度になり、高学年に行くほど自然美をあげる比率が多くなると述べている。

また、高浦浩が小・中学生を対象に、高浦浩(1991)¹⁰⁾「児童の美意識と鑑賞指導の基本問題」、高浦浩(1994)¹¹⁾「児童生徒の美意識の実態について I: 小・中学生の『美』の解釈」及び、高浦浩(1996)¹²⁾「児童・生徒の美意識の実態について II: 小・中学生の美の対象」において、児童の美に対する対象や意識を明らかにして、美術教育の在り方の提言をしている。

高浦浩(1996)は、学年差における美意識について下記のように述べている。

「自然」のグループの中で、学年差の顕著な事項は自然一般、自然の風景、夜景、青空、星、花、虹、生き物などである。このうち、自然一般、自然の風景、夜景、青空は学年が上がるにつれて数値が増加していく傾向があり、星、花、虹、生き物などは逆に学年が上がるにつれ数値が減少していく。こうした傾向は、年齢発達にともなう美意識の変化と見ることができる。¹³⁾

子どもの美についての現在地点を明らかにすることが必要である。子どもの美意識の実態を知ることが、美における児童理解に他ならない。¹⁴⁾

美意識に関する先行研究の多くは、小学生以上を対象としている。しかし、幼児の美意識にかかる先行研究は少ない。美意識に関して、小学生に関しては 対面、書面により直接的に聞き取りができる年齢であるが、幼児に聞き取りをすることは、非常に難しいと考えられる。幼児理解や子どもの姿に注視している幼児教育において、幼児の美に関する意識を理解しなければ、幼児理解も困難であるといえる。

2.2 調査方法

この研究では、現在保育に携わり、子どもの姿を熟知している、幼稚園教諭及び保育士へのアンケートから、幼児期における「美しさ」についての意識を探っていくこととした。また、滋賀短期大学に入学してきた学生にも1年生前学期の第一回目の授業において、同アンケート調査を行い、その差異があるのかも確認した。

調査期間：2020年4月1日から2020年11月10日まで、

調査対象者：保育者：滋賀県内の幼稚園保育所に従事する教諭及び保育士 53名

アンケート配付53枚 アンケート回答率94.3% 回答数52

学 生：滋賀短期大学一回生 123名

アンケート配布123枚 アンケート回答率100% 回答数123

アンケートは、無記名、性別、保育経験年数、年齢を問い、記述式の部分に関しては、幼稚園教育要領から領域「表現」の部分の抜粋を示し、下記の質問をした。

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領において、ほぼ同じように、美しいもの、美しさ という言葉が何度か出てきます。(下記、幼稚園教育要領 参照) この、「美しいもの」、「美しさ」とはどのようなものだと思いますか。ご自由にお書きください。

◆幼稚園教育要領 表現 からの抜粋

- 1 ねらい (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- 2 内容 (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- 3 内容の取扱い (1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。

アンケート調査に関しては、対象者に書面で、無記名であること及び個人情報には配慮することを説明して協力を依頼し、同意を得たもののみデータ化し使用した。なお、本研究は滋賀短期大学の研究倫理委員会の審査にて承認を得ている。

アンケートの集計はデータ化し、その後テキストマイニングにより分析を行った。テキストマイニングは、記述部分をKH Coder¹⁵⁾を利用して行った。KH Coderの利点は、記述文章における言葉のつながりを共起ネットワークで視覚的に表現でき、恣意的となりがちな操作を避けながらデータを考察できることである。取得したデータを、どのような文言が使われ、何が述べているか、共起ネットワーク図を利用し図式化した。また、個々の少数の意見についてもコンテキストを検証し考察を行った。

3. 分析結果

3.1 調査結果全体について

現任者及び学生全体 174人
 総抽出語数（使用） 12,158（4693）
 異なり語数（使用） 1,380（1.152）

表1 現任者及び学生記述内容
 頻出語（上位50位）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1 美しい	395	26 海	19
2 思う	252	27 様々	19
3 自然	112	28 作る	18
4 人	97	29 川	18
5 子ども	87	30 言葉	17
6 心	81	31 作品	17
7 感じる	76	32 環境	16
8 見る	73	33 光	16
9 色	70	34 考える	16
10 きれい	60	35 表現	16
11 花	51	36 物	16
12 自分	37	37 山	15
13 姿	32	38 笑顔	15
14 音	31	39 キラキラ	13
15 形	29	40 感性	13
16 景色	28	41 使う	13
17 空	24	42 生活	13
18 絵	23	43 他	13
19 感動	22	44 豊か	13
20 水	22	45 雨	12
21 それぞれ	21	46 出る	12
22 動かす	21	47 人間	12
23 風景	20	48 保育	12
24 目	20	49 光る	11
25 たくさん	19	50 出来事	11

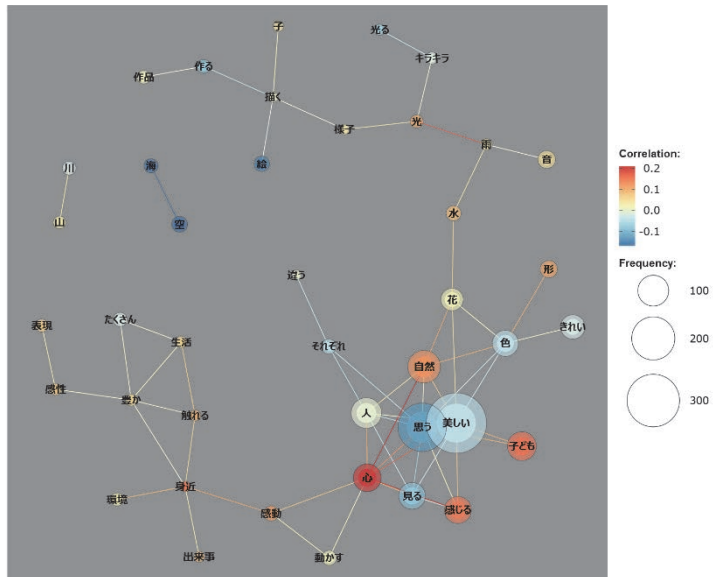


図1 現任者及び学生記述内容 共起ネットワーク

3.2 現任者調査結果について 現任者 52 人

総抽出語数（使用） 13,492（1,353） 異なり語数（使用） 623（478）

表 2 現任者記述内容 頻出語（上位 50 位）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1 美しい	93	26 身近	6
2 思う	49	27 生活	6
3 感じる	41	28 表現	6
4 子ども	38	29 保育	6
5 心	34	30 目	6
6 自然	33	31 雨	5
7 色	21	32 言葉	5
8 姿	19	33 光	5
9 音	16	34 考え方	5
10 人	15	35 子	5
11 見る	14	36 持つ	5
12 自分	14	37 心地よい	5
13 形	13	38 生き物	5
14 きれい	12	39 大人	5
15 花	10	40 友達	5
16 様々	10	41 遊び	5
17 感動	9	42 それぞれ	4
18 気持ち	9	43 一人ひとり	4
19 水	9	44 一生懸命	4
20 感性	8	45 教育	4
21 環境	7	46 興味	4
22 思い	7	47 偶然	4
23 笑顔	7	48 経験	4
24 動かす	7	49 見える	4
25 触れる	6	50 考える	4

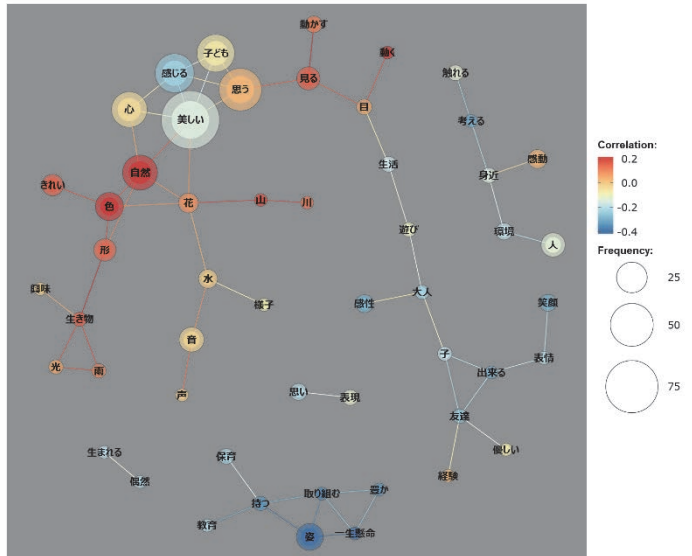


図 2 現任者記述内容 共起ネットワーク

3.3 学生調査結果について 学生 123 人

総抽出語数（使用） 8,666（3,340） 異なり語数（使用） 1,107（921）

表 3 学生記述内容 頻出語（上位 50 位）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1 美しい	302	26 目	14
2 思う	203	27 感動	13
3 人	82	28 姿	13
4 自然	79	29 水	13
5 見る	59	30 言葉	12
6 子ども	49	31 考える	12
7 色	49	32 出る	12
8 きれい	48	33 人間	12
9 心	47	34 他	12
10 花	41	35 物	12
11 感じる	35	36 キラキラ	11
12 景色	27	37 光	11
13 自分	23	38 光る	11
14 空	22	39 山	11
15 絵	20	40 使う	11
16 海	18	41 表現	10
17 それぞれ	17	42 環境	9
18 たくさん	17	43 映く	9
19 作る	17	44 出来事	9
20 風景	17	45 豊か	9
21 形	16	46 様々	9
22 作品	16	47 お花	8
23 音	15	48 違う	8
24 川	14	49 音楽	8
25 動かす	14	50 笑顔	8

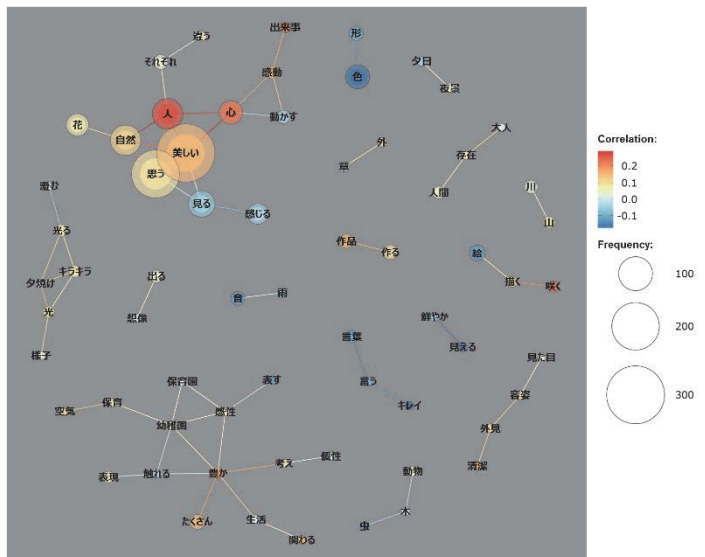


図 3 学生記述内容 共起ネットワーク

3.6 調査結果全体 年齢を外部変数とした対応分析

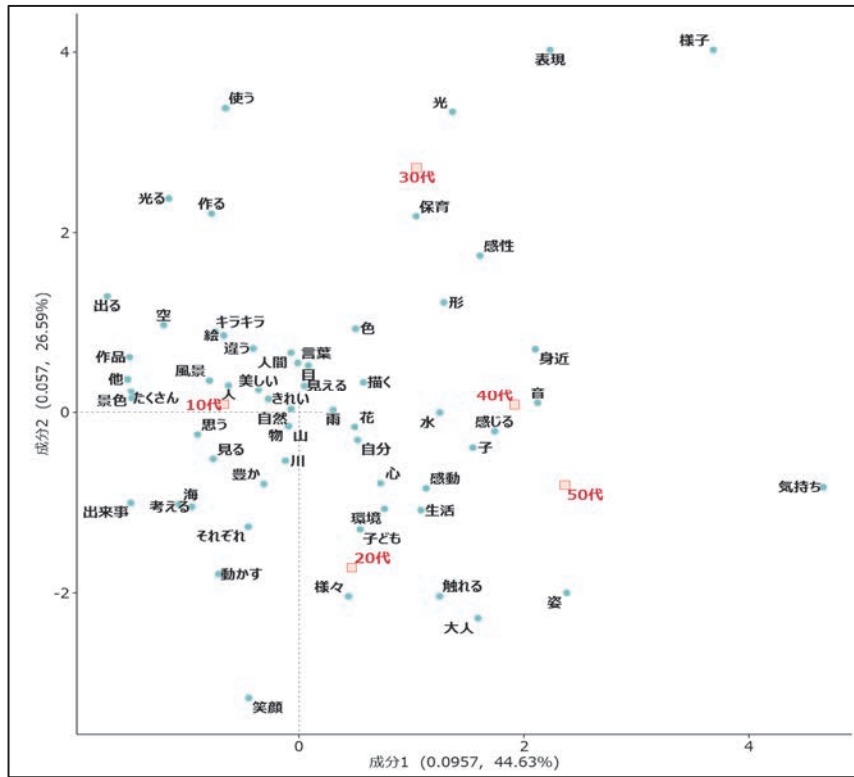


図6 現任者及び学生記述内容 対応分析

4. 考察

まず、アンケート全体の結果 図1、表1からは、当然「美しい」という言葉を中心に述べられている。幼稚園教育要領の抜粋をアンケート時に示しているため、多くの場合その文脈のなかで「美しいもの」を中心に「美しさ」について述べており、自然物や身近なものに見られる対象物の現象や形や色を記述している。

図2、表2、図3、表3及び個々のデータで確認していくと、具体的には自然物をあげる事例が多く見られ、全体で56%、学生では61%、現任者では45%が具体的なものについて記述していた。しかし、現任者においては抽象的記述のみしているものが半数以上であった。

次に、「美しいもの」、「美しさ」について、心の動きとして記述しているものが、全体で22%、現任者では32%、学生では18%がいた。しかし、心という言葉を使っても、心の動きや感動ではなく、心や心情、心自体を美しいと記述しているのが全体で20%、現任者では38%、学生では13%いた。また、アンケート結果からは、「美しいもの」や「美しさ」は物自体の存在だけでなく、そのものに

出会う、触れ合うなどを通しての思いや感じることによる、心と感性の響きが必要であると記述している事例もあった。保育環境との関わりと、そのプロセスの中で美しいものが語られているといえる。図4においては、20年以上の保育者からは、保育環境という事で「美しさ」や「美しいもの」を考えている事が読み取れる。図5からは、現任者と学生とでの視点の違うことが分かる。現任者と学生の比較では、学生の回答には「子ども」という言葉は49回出現しているが、他の語と強い共起関係がなかった語として、共起ネットワーク図に出てきていない。その代わりに、人という言葉を使用していると考えられる。保育者は、保育を前提に考えアンケートを答え、子どもとの関係の中で回答をしている。図6における10代は、すべて学生である。この分析からは経験豊富保育者だけでなく、現任者は少なからず子どもや保育を念頭に記述しているといえる。「美しいもの」、「美しさ」に関して、物や現象だけでなく、子どもの心や、心の動き、感動の体験なども「美しいもの」と、とらえて記述しているのが学生と大きく違う点である。

5. 終わりに

今回の調査では、幼児期の「美しいもの」「美しさ」に関する意識について、保育者をとおして探ることを試みた。先述の河辺杲(1952)⁸⁾における聞き取り調査では、「あなたが一番美しいとおもものはなんですか。」という問いに答えられない一年生が38%いたとされている。聞き取りが難しいのではなく「美しい」という意識がまだ発達段階という可能性は否定できない。もしそうであるのであれば、その「美しい」という意識が育つ幼児期の体験や教育は非常に重要であるといえる。

アンケートについては、「美しいもの」「美しさ」に関する具体的なものが記述されるであろうと推測していたが、現任保育者からはそれだけではなく、子どもの姿や子どもの心自体を美しいものととらえている記述が少なからずあった。それは保育者としての、「美しさ」に関する意識の断面が読み取れたと考える。保育者が自然美や人工美などの現実に存在するものや現象だけでなく、心や心情を挙げている点は非常に興味深い。幼児の育つ環境の中に幼児の心と体が存在していると理解していることが読み取れる。つまり保育者にとって、「美しさ」とは、対象物や事象に対して感性に響く子どもの「心」に存在していると考えていることがわかった。

幼児教育における特に領域「表現」の分野においては、「美しいもの」、「美しさ」に関する意識について、子ども自身の心や心情も含み、その専門的事項の内容の検討を進めていくことが重要であると考えられる。

本来、美の概念は美学の範疇であるが、幼児教育に関しても幼児の美意識については、明らかにしていく必要がある。しかし、幼児への聞き取りが難しいという点においては、その研究の方法が今後の課題である。なお、今回の調査では、保育者以外の一般市民からのアンケート調査を実施していないため、この結果が保育士特有のものとは明確にできるわけではない。またそれも、今後の課題としなければならない。

謝辞

本論文の作成にあたり、アンケート調査にご協力いただいた、幼稚園教諭、保育士、学生の皆様に感謝いたします。

文献

- 1) 文部科学省 (2017) 平成 29 年 3 月 幼稚園教育要領
- 2) 厚生労働省 (2017) 平成 29 年 3 月 保育所保育指針
- 3) 内閣府 (2017) 平成 29 年 3 月 幼保連携型認定こども園教育・保育要領
- 4) 新村出編 (2018) 『広辞苑 (第 7 版)』 岩波書店, p. 2427
- 5) 新村出編 (2018) 『広辞苑 (第 7 版)』 岩波書店, p. 275
- 6) 岡本礼子 (2020) 国際幼児教育学会第 41 回大会発表論文集, pp. 42-45
- 7) 岡本礼子 (2020) 国際幼児教育学会第 41 回大会発表論文集, p. 42
- 8) 田中敏明, 松島暢志, 関戸ひとみ, 内賀良香, (2016) 「幼児の「きれい」に関する美意識の発達」九州女子大学紀要 第 53 巻 2 号, pp. 13-24
- 9) 河辺杲 (1952) 「子供の美意識と技術の問題」美術教育 1952 巻 5 号, pp. 24-26
- 10) 高浦浩 (1991) 「児童の美意識と鑑賞指導の基本問題」美術教育学第 13 号, pp. 199-08
- 11) 高浦浩 (1994) 「児童生徒の美意識の実態について I: 小・中学生の「美」の解釈」美術教育学: 美術科教育学会誌, 15 巻, pp. 195-204
- 12) 高浦浩 (1996) 「児童・生徒の美意識の実態について II: 小・中学生の美の対象」美術教育学: 美術科教育学会誌, 17 巻, pp. 131-141
- 13) 高浦浩 「児童の美意識と鑑賞指導の基本問題」1991 美術教育学第 13 号, pp. 199-208
- 14) 高浦浩 (1996) 「児童・生徒の美意識の実態について II: 小・中学生の美の対象」美術教育学: 美術科教育学会誌, 17 巻, p. 137
- 15) 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析 —内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版